

福山大学人間文化学部人間文化学科 日本近現代文学研究室 ゼミ
井伏鱒二の文学(「在所もの」)に描かれた地域文化 2016

福山大学教育振興助成事業

小説「鞆ノ津茶会記」
—中世の備後から福山の町を見る—
福山市観光化のためのストーリー構築を目指して



福山大学人間文化学部 日本近現代文学研究室
2016

ゼミ担当	福山大学人間文化学部人間文化学科 教授 青木美保(日本近代文学専攻)
学生	井上 翼 佐藤 未佳子 高橋 幸子 溝口 莉奈 宮地 菜緒 山廣 愛

福山大学人間文化学科日本近現代文学研究ゼミ 井伏鱒二「鞆ノ津茶会記」の舞台を訪ねて

フィールドワーク 2016 日程表

目的

郷土史家・田口義之氏の講義により、神辺・鞆の浦周辺の中世の歴史遺産を実地踏査して、写真・記録等を取りながら、小説の舞台・モデルなどを知るとともに、これを現代に伝えるきっかけとなる物や場所、及び物語を発掘する。

第1回 神辺 2016年10月30日

- 9:30 松永駅スクールバス発着場集合
- 10:00 赤坂八幡神社見学
- 10:15 三宝寺(山手町3370)で杉原家の墓、位牌等見学。
- 10:45 豊玉姫神社で杉原家の奉納した兜等見学。
- 12:00 昼食
- 13:00 鳥居兵庫頭屋敷跡(神辺町湯野)見学。
- 13:30 備後国分寺見学
- 14:00 蓮乗院五仏像見学(神辺町八尋1201)
- 14:00 出発
- 14:30 松永駅発着場到着・解散。

参加者 ゼミ学生6名、その他学生有志15名、報道関係者2名、大学関係者2名

第2回 鞆の浦 2017年1月22日

- 9:30 松永駅スクールバス発着場集合
- 10:15 大可島円福寺(大可島城跡)見学
- 10:30 鞆の浦歴史民俗資料館(鞆城跡)見学。
- 10:45 対潮楼見学。
- 11:40 安国寺見学。
- 12:00 昼食
- 13:00 小松寺見学。
- 13:30 沼名前神社見学
- 14:00 小鳥神社見学
- 14:30 鞆の浦出発。
- 15:30 松永駅スクールバス発着場到着・解散

参加者 ゼミ学生6名、その他学生有志15名、大学関係者3名



赤坂八幡神社（盛重再興） 再興当時の部材を見学



三宝寺境内の杉原家墓



天別豊姫神社蔵 伝・杉原盛重奉納 兜



三宝寺 杉原盛重位牌



山手町 大間屋敷跡



蓮乗院蔵 五仏像



湯野 鳥居兵庫頭屋敷跡



大可島から瀬戸内海を臨む



大可島 円福寺 大可島城跡



阿弥陀寺 軀大仏 阿弥陀如来座像



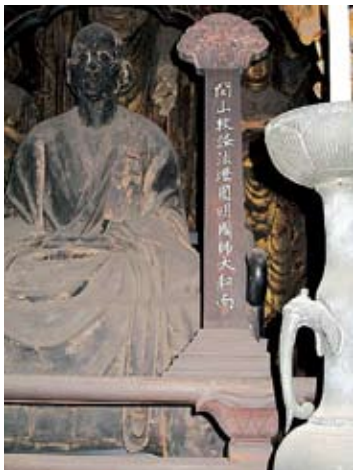
小鳥神社 製鉄の神



沼名前神社



安国寺 釈迦堂



安国寺創建 法燈国師座像



安国寺恵瓊作 枯山水庭園

目 次

福山大学人間文化学科日本近現代文学研究ゼミ フィールドワーク 2016 日程表
実地踏査アルバム 井伏鱒二「鞆ノ津茶会記」に描かれた中世の福山
巻頭言

第一部 学生の報告

第1回フィールドワーク神辺 一杉原盛重の跡をたどる一

宝篋印塔（赤坂八幡神社）	佐藤 未佳子	1
杉原盛重の人物像	高橋 幸子	2
鳥居兵庫頭屋敷跡	山廣 愛	3
神辺城について	井上 翼	4
備後国分寺の歴史	宮地 菜緒	5
蓮乗院「五仏像」	溝口 莉奈	6

第2回フィールドワーク鞆の浦 一小説の舞台を訪ねて一

福山市鞆の浦歴史民俗資料館	佐藤 未佳子	7
対潮楼（福禅寺）	溝口 莉奈	8
安国寺の歴史	山廣 愛	9
小鳥神社について	井上 翼	10
沼名前神社	宮地 菜緒	11
小松寺の歴史	高橋 幸子	12

第二部 指導とフィールドワークのまとめ

実地踏査の講師から

鞆津茶会記の登場人物について	田口 義之（備陽史探訪の会会長）	13
----------------	------------------	----

ゼミ指導教員から

井伏鱒二「鞆ノ津茶会記」の舞台

一神辺町の観光化立案のためのストーリー一	青木 美保（人間文化学科教授）	15
----------------------	-----------------	----

第三部 一般参加者の感想

栗村 真理子	19
前田 貞昭（兵庫教育大学大学院教授）	22

実地踏査配布資料（田口義之氏作成）	25
-------------------	----

編集後記

巻 頭 言

青木美保

福山大学人間文化学科日本近現代文学研究室では、2007年から地元の文豪、井伏鱒二の「在所もの」を取り上げて、その舞台や小説に描かれた地域文化の調査を続けてきた。これまで取り上げた小説は、「朽助のゐる谷間」、「鐘供養の日」、「田園記」、「海揚り」である。昨年は、その調査において出会った井伏の福山中学時代の同級生、高田類三のご子息奎吾氏から井伏の類三宛未公開書簡がもたらされ、今後の研究の拡張と本格化が可能となった。

今年度は、小説「鞆ノ津茶会記」を取り上げて、その舞台を実地踏査した。この小説は、秀吉が刀狩り令を出した天正16年から、関ヶ原の合戦の前年（慶長4年）までの秀吉施政の後半期の備後を舞台として、そこで催された近隣武将の架空の茶会の記録を描いたものである。この小説の面白さは、歴史の変転が備後の視点から眺められていることにある。茶会での噂話の中には、秀吉の中国攻め、本能寺の変、九州島津征伐、朝鮮出兵などが登場し、その中央や他地域の動きと備後地域の関係を、地域の武将が語るのである。

そこには明確なストーリーはなく、読者の様々な読み取りが可能だが、今回のフィールドワークで、そこに備後、福山市の町の形成史が浮かび上がって来た。加えて、茶会で出された、四季折々の食べ物—備後の海のもの、山のもの、まくり畳みなど産物がさりげなく描き込まれており、本小説は井伏の「在所もの」と歴史小説の集大成ではなかったろうかと推測する。本作品は、1983（昭和58）年から連載が始まったもので、井伏晩年（85歳）の作である。（『井伏鱒二全集 27巻』の解題によれば、『海燕』1983・7～1984・4、1985・4～同・8に「鞆ノ津日記」で連載、単行本『鞆ノ津茶会記』1986・3 福武書店）

今回の研究調査には、井伏の描いた神辺の姿を導き手として失われた文化の片鱗を拾い集め、現在に繋げたいという目標がある。今回の実地調査においては、その文化財の危機的状況についても、講師の田口義之氏からのお話があった。文化財保護の財源確保のためにその観光化を計画し、人の賑わいを取り戻して経済効果につなげることができればと考える。蚊の鳴くような声ではあるが、とりえず声を上げてみることにした。まずは学生たちと文化遺跡をめぐり、若い世代に伝えることが手始めである。

今回の調査は、第1回が神辺を中心とする杉原盛重の跡をたどる調査、第2回が鞆の浦を中心とする作品の舞台をめぐる調査で、福山市の旧山陽道沿いの文化と瀬戸内海と接する文化を把握することができた。

なお、今回の調査は、神辺町歴史民俗資料館の展示『杉原・福島時代の神辺城』を下見で見学したことに端を発する。その後、人間文化学科地域文化研修2015で神辺城を訪問した際に、当館には資料提供などご協力いただいた。また、その際の展示品の一つで、今回郷土史家・田口義之氏の調査が初めてなされた杉原盛重の銘がある五仏像については、蓮乗院に、天別豊姫神社には、盛重奉納の兜、盛重の菩提寺、三宝寺にはそれぞれ見学をご快諾いただいた。とりわけ、講師の田口義之氏には地域史について貴重なご教示いただいた。謝して、御礼申し上げます。

第一部 学生の報告

第1回フィールドワーク神辺 —杉原盛重の跡をたどる—



第2回フィールドワーク輛の浦 —小説の舞台を訪ねて—



宝篋印塔（赤坂八幡神社）

佐藤 未佳子

郷土作家・井伏鱒二の「鞆ノ津茶会記」に登場する、もしくは縁のある場所を巡った今回のフィールドワークから、福山市赤坂町にある宝篋印塔（ほうきょういんとう）と赤坂八幡神社について取り上げていきたい。

【キーワード 宝篋印塔 赤坂八幡神社 杉原盛重】

宝篋印塔は墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で石造の遺品が多く、この名称は「宝篋印陀羅尼經」を納めたことに由来している。密教系の塔で、鎌倉期以降は宗派を問わず造立されるようになった。塔身・基礎部の大きさの違いをはじめ、仏像のレリーフを刻む、二重輪郭をとるなど、時代や地域によって塔には様々な形態がある。赤坂八幡神社の宝篋印塔は花崗岩製で高さが 2.35 メートルある。三段の基壇上に乗っており、塔の基礎の四面に格挟間が刻まれ、塔身には判然としないが梵字（種子）のようなものが薄肉で彫られている。銘はないが、各部の形式から南北朝時代の作と考えられている。昭和 39 年（1964）3 月 31 日に福山市指定重要文化財に指定された。

この宝篋印塔のある赤坂八幡神社の正式名称は「八幡神社」であり、別名「鋤前八幡神社」ともいう。応神天皇・神功皇后・宗像三女神を祀っており、承和年間（834—48）に創祀、建久 2 年（1191）に再建されたと伝えられている。その後は天正 8 年（1580）に、戦国時代に実在した武将であり神辺城主でもあった杉原盛重が大檀那となり、神殿の再建を行ったという棟札を蔵している。

今回のフィールドワークで訪れた赤坂八幡神社がある福山市赤坂町は私の地元であり、神社に入る道の手前に立っていた石造りの常夜灯もよく見ていたもので、神社を訪れることはあまりなかったが昔から知っている場所だった。しかし、この赤坂八幡神社の歴史自体についてはこれまで深く知ろうとしてこなかったため、神社を再興したのが杉原盛重であるということを初めて知り、驚いた。杉原盛重は小説「鞆ノ津茶会記」にも登場し、当時は全国でも有力な武将だった。講師として招かれた郷土史家・田口義之氏によると、宝篋印塔は盛重が再興した時にはすでにあり、来るたびに参拝していたという。私たちが歩いた赤坂八幡神社や山道を登って見た宝篋印塔も、過去に盛重も同じように歩き、見たのだろうかと思うと、何だか盛重を身近に感じられるような気がした。



神社横の山道を登った先にある宝篋印塔

<参考文献>

『広島県神社誌』広島県神社誌編纂委員会編集 発行広島県神社庁 平成 6 年 8 月 1 日
『福山の遺跡 100 選』備陽史探訪の会 平成 22 年 9 月

杉原盛重の人物像

高橋 幸子

～三宝寺～

大永 2 年 (1522)、銀山城主杉原匡信によって再興されたと伝わる古刹である。杉原盛重は銀山城の杉原氏の出身であった。杉原氏は今の丸の内から本庄町にかけて存在した「杉原保」を「名字の地」とした有力国人で、鎌倉時代の中頃、京都から鎌倉に下り幕府奉公人となった伯耆守平光平を祖とし (木下和司「備後杉原氏の出自について」山城志一六集など)、南北朝時代以来、その一族は備後南部に広く勢力を持った。盛重が毛利氏に仕えるようになった契機は、神辺合戦での盛重の戦いぶりであった。勇猛に戦う盛重の「武者ぶり」に惚れ込んだ元就の次男吉川元春が、彼を神辺城主山名理興の跡継ぎとして強く推薦したため盛重は神辺城主となった。そのいきさつから、盛重は吉川元春の配下として主に山陰地方で活躍し、尼子氏との戦いの中で、毛利氏にその武将としての器量を認められていったのである。

～天別豊姫神社～

今は朽ちて形が崩れているが、漆が塗られていた痕跡がある。この兜からは、勇壮に戦う甲冑姿の盛重が想像される。



～備後国分寺跡～

杉原盛重の兜→

天平 13 (741) 年、聖武天皇の発した国分寺建立の詔によって備後国分寺は建立された。後に、杉原盛重が修覆したとされる。盛重は、文化財保護にも力を入れていたことが分かる。

～蓮乗院 (二宮神社) ～

この寺に安置されている 5 体の仏像が公開された。そのうちの 1 体の仏像の背面に「平氏杉原盛重」と書かれているため、この仏像は盛重が奉納したということが分かる。そのことから、盛重は信仰心の厚い人物であったことがうかがえる。

考察： 杉原盛重は「鞆ノ津茶会記」に、「備後国で小早川家の傘下にあつた神辺城主」として登場し、彼の二人の息子による相続争いについて詳しく書かれている。今回のフィールドワークを通して分かったことは、杉原盛重は、信仰心が厚く、領内の文化財保護にも力を注ぐ、有徳な人物であったということだ。また『備後叢書』の中の「西備名区」には、「盛重、智計勇烈、毛利家の士、彼に並ぶ者なし」とあり、盛重が知略に長け、勇猛な武将であったことが読み取れる。盛重亡き後、相続争いで家中は乱れる。もし、この顛末を盛重が知ったら涙したことだろう。

<参考文献>

田口義之 『備後戦国紀行』 福山市観光誘致協議会 平成 24 年 4 月

『備後叢書 (三)』 備後郷土史会 得能正通 歴史図書社 昭和 45 年 9 月

鳥居兵庫頭屋敷跡

山廣 愛

「鞆ノ津茶会記」では、天正十八年四月十六日を始め備後国深津郡湯野村、鳥居兵庫頭屋敷内の数奇屋にて何度か茶会が開かれた。御手前は、ご亭主である鳥居兵庫頭が務めた。この鳥居兵庫頭という人物は、湯野村の山王山城で杉原家の家来を務めていた。だが、天文の末に毛利家が没落したため鳥居兵庫が山王山城を引き継いだ。天正十九年十二月の暮れ、城主の杉原盛重が病気で亡くなると頭を丸め、一向宗徒などが定めた年貢二公一民の割で小早川家から田地を借り、土着して国人になった。兵庫頭が入道になったのは無常を感じたせいもあり、因幡国の支城に時ならぬ出来事があって責任を取らされたためでもあったといわれている。

鳥居兵庫頭屋敷は湯野村の下御領村國分寺の脇の城の内に入り、兵庫塚という鳥居兵庫頭のお墓が山王山にある。鳥居兵庫頭は、上御領村の佳士である重政氏の女を妻に迎えた。この地方は、用水不自由な場所であり田に水を流すことが困難であった。それを知っていた重政氏は、兵庫頭の家を嫁がせる女に引き出物として三日三夜と用水を参らせ、兵庫持地を計り三日三夜と水を引けるようにした。数日後には、二日二夜宛、二度にて比村一圓に水を引けるようになった。そして、用水の不自由は解消されて住人達は喜び、現在でもその用水は大事に使われている。こういった事があり、兵庫頭は住人から慕われ、「兵庫塚」が伝承されてきた。だが、神辺の地は、戦国時代に戦火によって荒廃し、鳥居兵庫頭の屋敷も今はない。現在は、周囲に住宅などが建っており、鳥居兵庫頭屋敷の跡は田地の中になっていた。しかしよく見ると、土塁の痕跡と思われるものがあり、古墓と思しきものも残っており微かに屋敷があったということを感じることができた。



〈参考文献〉

『西備名区 卷之三十五』 卷三十五 「安那郡」 「湯野城の内と中条土居屋敷」
〔備後叢書 (3)〕 芸備郷土誌刊行会 昭和54年6月20日)

神辺城について

井上 翼

神辺城は今回のフィールドワークでは行っていないが、前年の地域文化研修で訪れている。神辺城は杉原盛重が城主であったこともあり、「鞆ノ津茶会記」で重要な役割を担っているため、神辺城について調査した。

1. 神辺城について

神辺城は建武二年（1335）に築かれ、その後300年備後国の守護所であった。

杉原理興が大内義隆の命により神辺城を落としたのは天文七年（1538）で、神辺城主になるとともに姓を山名とした。大内氏が月山富田城攻めに失敗すると、山名理興は尼子に寝返った。これにより、大内義隆は毛利元就らに城攻めを命じ、神辺合戦が始まった。天文一八年、平賀隆宗の攻勢により山名理興は逃亡、神辺城は陥落した。理興は浩治元年（1555）に毛利氏に謝罪し、神辺城主に復帰。同三年に没し、その後を杉原盛重が継いだ。

永禄六年（1563）には神辺城は子の元盛、景盛が置かれたが、天正一〇年（1582）兄の元盛が、景盛に父の遺産を分けなかったことを景盛は恨み、元盛を謀殺した。この争いにより、杉原氏は滅亡。その後毛利が城を管理するようになった。

慶長五年（1600）、福島正則の家老丹波正澄が城主となる。元和5年（1619）に水野勝成が入ってきたが、すぐ福山城に移り、その際に廃城となった。

2. 「鞆ノ津茶会記」と神辺城

「鞆ノ津茶会記」では、神辺城はたびたび出てくるが、特に元盛、景盛の争いについて言及されている。神辺城での兄弟の争いは備中高松城の水攻めの際の清水宗治の切腹と並んで語られており、自らが家を相続しようとしたために杉原家を滅ぼす原因となった景盛の行いと、講和のために切腹し、備中高松城の危機を救った清水宗治の潔さが対比されている。

3. 感想

神辺城では山名理興の時代は尼子と大内の間を転々とし、盛重の統治後も、杉原家は景盛の軽挙により滅びた。戦国の時代を象徴するような、激動の城であった。そのため、井伏鱒二も特に神辺城を重要視し、たびたび「鞆ノ津茶会記」に登場させたのではないだろうか。

参考文献

「西備名区 卷三十三」、『備後叢書 第三卷』 芸備郷土史刊行会 昭和54年6月20日
『日本城郭大系 第13巻』 新人物往来社 昭和55年1月10日



備後国分寺の歴史

宮地 菜緒

第一回目のフィールドワークで見学した場所の中に国分寺がある。国分寺は天平 13(741)年に聖武天皇の発した国分寺建立の詔によって国々に建設されたものである。その正式名称は「金光明四天王護国之寺(こんこうみょうしてんのうごこくのてら)」といい、律令国家体制の完成期に鎮護国家の義経に基づいて造営されたものである。その建立は一朝にしてなったものではなく、奈良時代の中頃にはすべての建立をみたようである。

そして、国分寺の中心は塔に納められた天皇宸筆の「金光明最勝王経」であったが、しだいに金堂中に重きがおかれ、最終的にもともと国分寺制がとられる前に各国に造立させた一丈六尺の釈迦如来像がその本尊として祀られていたようだ。天皇の



詔によると、国ごとに七重塔一区をつくり、金光明最勝王経・法華経各一〇部を映して備え、別に宸筆の金光明最勝王経一部を塔に置き、これによって聖法を天地とともに永く伝え、擁護の恩のつねに満たんことを冀うと宣せられた。国分寺の建設はその当時すでに周辺に建てられていた寺から瓦を集めたりと、国をあげての大掛かりなものであったことが分かる。また、広島県史によると国分寺は国々の正税出挙の一部を割いて運営され、備後国分寺料は稲二万束、安芸国分寺料は稲三万束の元稲を設定されていることが『弘仁式』に見られ、『延喜式』もそれを踏襲している。

なお、天文二十年には毛利元就が参拝し、香華料を献上、永禄四年(1561)には、神辺城主杉原盛重が二十貫の土地を寄進して香華料とし、七間四方の草葺きの本堂が建立されたという。しかし慶長五年、福島正則が芸備二国を領すると荘園を悉く没収されたとのことである。

寺の歴史は、長い間の有為転変を物語るものであった。

〈参考文献〉

『広島県史原始古代通史 I』(広島県 昭和 55 年)

蓮乗院五仏像

溝口 莉奈

杉原盛重の事跡を辿る今回のフィールドワークで、私たちは以前神辺の資料館に展示されていた杉原盛重らによって寄進されたと考えられる仏像を蓮乗院にて拝観した。

蓮乗院には、阿弥陀如来像、薬師如来像、虚空蔵菩薩、毘沙門天像、聖観音の五像が安置されていた。



この五仏は、金剛界五仏、五智如来とは別のものとなっている。金剛界での五智如来は、大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就または釈迦如来。胎蔵界では、大日如来、宝幢如来、開敷華王如来、無量寿如来、天鼓雷音如来となっている。

阿弥陀如来は、先祖霊が浄土に赴くように祈念するものや、浄土思想に関する仏である。薬師如来は、重病に罹った際に信仰すれば命をつなぐことができ

るものとして古来から信仰されている仏である。虚空蔵菩薩とは、虚空の如く無限に智慧を蔵する意であり、この菩薩を本尊として虚空蔵真言を無数に唱えることで、無尽の記憶力を得ると説かれている。毘沙門天は、施財と護法の二つの働きを備えた神として信仰を得ており、のちに現世利益の性格を強めた。聖観音は、大乘仏教のあとに興隆した密教において観音の大慈悲の働きが協調され多種の変化観音が生み出されたその中にあっても変化しない本来の観音菩薩をいう。

五智如来像は、例えば、『日本仏教史事典』では、安祥寺の例を挙げており、そこでは大きいもので約一五八センチ、小さいもので一〇〇センチほどとある。蓮乗院に安置されている五仏は約四五センチほどで小さいものであった。

本来の五智如来とは全く違ったこの五仏が蓮乗院に安置されたのはおそらく、村人が薬師如来を信仰すれば病から救われる、虚空蔵菩薩を信仰すれば、勉強にご利益があるといった風にそれぞれの仏の性格だけで考えて持ち寄ったためではないかと推測する。また、農村で信仰されていたもので、廃仏毀釈の際にも、破毀されることなく保管されたのではないかと推察される。

〈参考文献〉

『総合佛教大辞典』 総合佛教大辞典編集委員会編 法蔵館 2005年2月

『日本の神仏の辞典』 大島建彦他編 大修館書店 2001年7月

『日本仏教史辞典』 今泉淑夫編 吉川弘文館 1999年11月

(<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/kannabe-rekishiminzoku/3151.html>)福山市神辺歴史民族資料館>神辺の寺院 2017年2月20日閲覧



福山市鞆の浦歴史民俗資料館

佐藤 未佳子

室町幕府最後の将軍である足利義昭が、織田信長を倒そうとして全国の大名たちに書状を送ったことで知られる鞆城。「潮待ちの港」で有名な鞆の浦を舞台とした、鞆幕府、鞆城、及び鞆の浦歴史民俗資料館について取り上げていきたい。

【キーワード 鞆幕府 足利義昭 鞆城 歴史民俗資料館】

足利義昭は織田信長の力によって第十五代将軍となることができたが、次第にその存在を疎ましく思い信長を倒そうとするものの、企ては失敗に終わり京都を追放される。しかし将軍職を解かれたわけではなかった義昭は鞆の浦へと御所を移し、そこが信長の勢力圏



道中から見た資料館

外の政治の中心となったことから（結果的には幻に終わってしまったが）、「鞆幕府」とされた。郷土作家・井伏鱒二の「鞆ノ津茶会記」には茶会の場所として「鞆ノ津城」が登場し、毛利氏の庇護を受けた際の義昭の動向が話題の一つとして描かれている。

関ヶ原合戦後、安芸・備後の領主となった福島正則は鞆の瀬戸内におけるその重要性から、鞆城の城郭を整え三重の天守閣を築いていたが、元和元年（1615）に一国一城令が出されてしまい、天守閣は三原城に移し、本丸や二の丸は解体された。その後は水野勝成が鞆を奉行支配し、鞆城山北麓にあった三の丸に奉行所が置かれた。

そして現在、鞆城跡は昭和 51 年（1976）7 月 13 日に福山市指定史跡に指定され、本丸跡には鞆の浦歴史民俗資料館が建っており、鞆を中心とした瀬戸内の歴史・文化に関する資料が紹介されている。その中でもむろの木についての展示があり、「我妹子が 見し鞆の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人ぞなき（妻が見たことのある鞆の浦のむろの木は、いつまでも絶えることなくあるけれど、その妻はもういない）」という鞆を代表する歌も紹介されている。これは飛鳥時代から奈良時代にかけての歌人・大伴旅人が、亡くした妻のことを想って鞆の浦で詠んだ歌で、万葉集にも収録されている。この歌が天平 2 年（730）に詠まれたということや、館内の様々な展示物から、鞆の浦が古くから名の残る歴史ある町であることがよく分かった。

<参考文献>

『福山の遺跡 100 選』備陽史探訪の会 平成 22 年 9 月

田口義之『備後戦国紀行』福山市観光客誘致協議会 平成 24 年 4 月

「第 2 回フィールドワーク配布資料」

対潮楼（福禅寺）の歴史

溝口 莉奈



「鞆ノ津茶会記」では、福禅寺で天正十六年五月二十七日に茶会が行われている。御振舞は福禅寺和尚、御客は梨田入道齋、村上左門、杉二郎左、宮地左衛門尉であった。その際の茶会では関白秀吉の刀狩により、百姓と泥仕合をさせられた肥後国領主佐々成政のことが語られていた。佐々成政も福禅寺に訪れたことがあり、その際は客殿である対潮楼から見える景色を絶景かな絶景かなと褒めたという。しかし、翌年天正十七年四月に福禅

寺は思わぬ火事で全焼してしまった、と書かれているが、福禅寺の火事について書かれた文献は見当たらない。

福禅寺の縁起は「鞆浦志」にあるように、新庄太郎という沼隈郡の長者の男の話しからはじまる。新庄太郎のその娘、明子は美しく秀でた才能をもっていた。彼女は村人から「天女の再生」「菩薩の応現」と賞賛を贈られていた。その噂は村上天皇の耳にも入り、天皇は明子を妃として迎えることを決めた。

明子は千手観音を信仰しており、ある日天皇に安産と先祖代々の人々が極楽浄土へ行けるよう、故郷に寺を建立したいと願っていた。天皇はその願いを聞き入れ、天台宗空也派の開祖・空也上人を呼び寄せた。

空也は備後一帯を旅し、鞆を見て、観世音菩薩のある場所に似た景色に勝るところはない、と、鞆に寺を建立した。

客殿である対潮楼からの景色は、仙酔島、皇后の島々が眼前に展開されとても美しいものであった。

正徳元年九月、通信使が宿泊した際に、李邦彦が「日東第一形勝」と賞賛したことは有名である。

寛永十三年に朝鮮通信使の宿にあてられてからは、通信使はここに宿泊し、美しい景色を見ることが無上の幸福とされていた。



〈参考文献〉

『歴史散歩 鞆の浦 今昔』 編者・発行 山陽新聞社 平成 8 年 4 月

『備後名所鞆津と阿伏兎』湯川大三郎・村田静太郎編 先憂会出版部 大正 13 年 8 月

『備後叢書(2)』 復刻者芸備郷土誌刊行会 昭和 54 年 6 月

国史跡 福禅寺対潮楼HP (<http://ww7.enjoy.ne.jp/~taichorou/>) 平成 29 年 2 月 20 日閲覧

安国寺の歴史

山廣 愛



「鞆ノ津茶会記」では、天正十七年三月十日をはじめ数回に渡り、安国寺で茶会が開かれた。亭主は、安国寺恵瓊の影武者を一度務めたことがあり、傍の者から「影殿」と云われていた武士である有田蔵人介、安国寺恵瓊が務める。

備後の安国寺は鞆ノ浦にある。元々鎌倉時代の文永十年にこの鞆を寄港する船舶の乗客からも喜捨が募られて、臨済宗法燈派として建てら

れた金宝寺が、暦応年間に足利尊氏によって全国に進立された安国寺の一つとして設定されたのである。天正四年頃から安芸の安国寺住持で、毛利氏の外交僧であった安国寺恵瓊が、この備後安国寺の住持を兼任した。彼の勧進によって、天正七年に本堂、慶長四年に釈迦堂(国指定重要文化財)が再建された。堂内には阿弥陀三尊立像、法燈国師座像(いずれも国指定重要文化財)が安置されている。



大正時代には、孤児やホームレスが雨風をしのいでいるなど荒廃が進み、大正七年に不審火で庫裏が焼失した。今はその礎石のみが残っている。また、恵瓊が作庭した枯山水庭園(広島県指定史跡)が往時をしのばせる。

また、安国寺前にある地蔵堂の地蔵は、「鞆浦志」によれば、「文禄年中、太閤秀吉公、三韓征伐し給ひし時、釜山海に石仏のありしを、帰朝の舟に載来り、此浦に置奉る事、年久し。」とあり、これを水野侯の家臣、酒井七郎衛門が奉行の時に、堂を建立し、像を安置したのが現在の地蔵菩薩堂だとある。これも「鞆ノ津茶会記」と同時代の話しである。



〈参考文献〉

『広島県史 中世 通史Ⅱ』 編集・発行広島県 昭和 59年 3月

『備後叢書(2)』 芸備郷土誌刊行会 昭和 54年 6月

小烏神社について

井上 翼

小烏神社は「鞆ノ津茶会記」には直接登場しないが、「草戸千軒は芦田川から出る砂鉄でたたらを踏んで刀剣を製造し、川上の藤尾村から出る金銀や比婆の山から出る銅を宋の国と交換した」といったように、草戸での製鉄に言及する箇所がたびたび出てくる。そこで、当時の中国地方を支えた製鉄に関連する場所として、小烏神社でフィールドワークを行った。

1. 当時の中国地方における製鉄

中国地方では古代から製鉄が盛んで、6世紀前後には製鉄が行われていた。中国地方のたたらは江戸時代に隆盛する基礎を築き、備後では庄原、三次市などで盛んに製鉄が行われていた。

2. 小烏神社について

小烏神社は、鞆の神である小烏大神と、製鉄の神である天目一個神を祀っている神社で、南北朝時代に足利尊氏と、尊氏の子である直冬が争った合戦の場ともなった神社である。

小烏神社に祭られている小烏大神は鞆鍛冶の一族の氏神であり、彼らは備後三原の刀匠たちの流れをくむ一族として伝わっている。鞆の鉄工業は江戸時代に最も繁栄し、現在の鞆に鉄工業が栄えているのはこれが理由である。

3. 感想

中国地方のたたら製鉄の最盛期と、鞆鍛冶の最盛期は同じであり、鞆鍛冶の繁栄は中国山地で製鉄された鉄によって繁栄したことがわかった。中国地方と製鉄は密接な関係で結ばれているため、中国地方の鉄文化について調査していきたいと考える。



参考文献

田口義之先生配布資料

野原健一『中国地方のたたら製鉄業の展開』 「広島県立大学 2015年 地域の理解」平成27年10月9日・16日 <http://www.fuuen.com/TTM/photo/2015/nohara.pdf>

沼名前神社

宮地 菜緒

今回のフィールドワークで見て回った中に沼名前神社がある。沼名前神社は鞆の祇園さんとも言われ、本社社殿の一段下には、桃山時代の能舞台が建てられている。この能舞台は、豊臣秀吉が愛用し伏見城内にあったもので、初代福山藩主水野勝成が二代將軍徳川秀忠より譲り受けたと伝えられている。秀吉といえば、「鞆ノ津茶会記」とも関係が深く、「鞆ノ津茶会記」の中では秀吉の九州攻略から朝鮮出兵へと至る時期が描かれている。そして、三代目水野勝貞がこの社に寄進し、1738(元文3)年この場所に設置された。この能舞台は、それぞれの材料に番号や符号をつけた組み立て式で、戦場にも持ち運べるようになっており、今では国の重要文化財に指定されるほどのものであり、日本で唯一現存している移動式能舞台である。

広島県神社誌には由緒として、「神功皇后西国へ御下向の際、船をこの浦に寄せられた時、海中より尺余の靈石を得たので神璽として斎場を設け、大綿津見命を祀られ、海路の安全と勝利を祈られたのが当社の創祀と伝える。」と記述がある。



写真は、沼名前神社HPから借用

また、沼名隈神社は延喜式神名帳に登載されている、いわゆる式内社である。そして、「式内社はすべて豊稔祈願の祈年祭奉幣を受ける」のであるが、これを案上の幣を受ける大社四九二座、案下の幣を受ける小社二六四〇座に分けられるのであるが、大社はさらに細かく分類されている。

〈参考文献〉

『広島県神社誌』 広島県神社誌編纂委員会 広島県神社庁 平成6年

『広島県史 原始古代 通史 I』 編集・発行 広島県 昭和55年



鞆・小松寺の歴史

高橋 幸子



萬年山 小松寺

開基、曇叟花禪師。安国寺六世の住職。

小松寺は一説に、治承元年丁酉、小松内府重盛公が建立したため、小松寺と称され、後年、重盛公の神霊を遷し祭り、五輪小塔を建て奠めたとされる。また、庭前に老小松が一幹あり、重盛公の御手栽と言われ伝えられている。

天長年中、祇園社を今の地に遷す以前は、今の祇園の社地もこの小松寺の境内だったのを、産子乞い請いて今の社地となす。それ故に寺は鳥居の内にある。

安元元年乙未、重盛は平家の後来をかながみ菩提の為、育王山へ金を渡した。その時、重盛は密かにこの浦まで忍び来て、寺に入って松を植え、後のしるしとして残した。

寿永二年癸卯、平家が都落ちする際、小松内府の次男新三位資盛卿が西海に沈落しこの浦に船を留め、この寺に入って剃髪し、月餘にしてここに松を植えた。後世、誤り伝えて重盛自身が植えたというのは非である。松を植えたことは、父子の間にて論じるのがよい。寺が多い中、資盛がこの寺に入って剃髪したのは、父の由緒があった故である。

その後年を経て、暦応三年庚辰、足利將軍尊氏卿の従将で、当国宮内亀寿山城主の宮下野守兼信が三百余騎でこの寺に陣し、新田一族金谷修理太夫と戦った。この時、旧記什物等が紛失した。唯一残った物は、松のみだったという。

この寺は、祇園社の由来によれば天長以前の開基と見る。しかし、開基安国寺六世といえは年紀がはるかに違う。天長は、淳和の年号である。安国寺開基は北条時頼、また尊氏の時共見れば、天長より尊氏まではおよそ五百余年、安国寺六世についてはおよそ六百年である。思うに、開基は天長以前にして知れず、中興が小松殿の時であって、安国寺曇叟師は再興である。

考察：「鞆ノ津茶会記」には、小松寺庫裡で村上左門が休養していることになっているが、田口氏によれば、この村上左門という人物は、同じく鞆にあった大可島城の城主村上左衛門大夫亮康をモデルにした可能性があるという。小松寺の開基が天長以前であるとする、平安前期から現存し、足利氏の興亡も見届けた由緒ある寺であるということが分かる。

〈参考文献〉 『備後叢書(三)』備後郷土史会編 歴史図書社 昭和45年9月

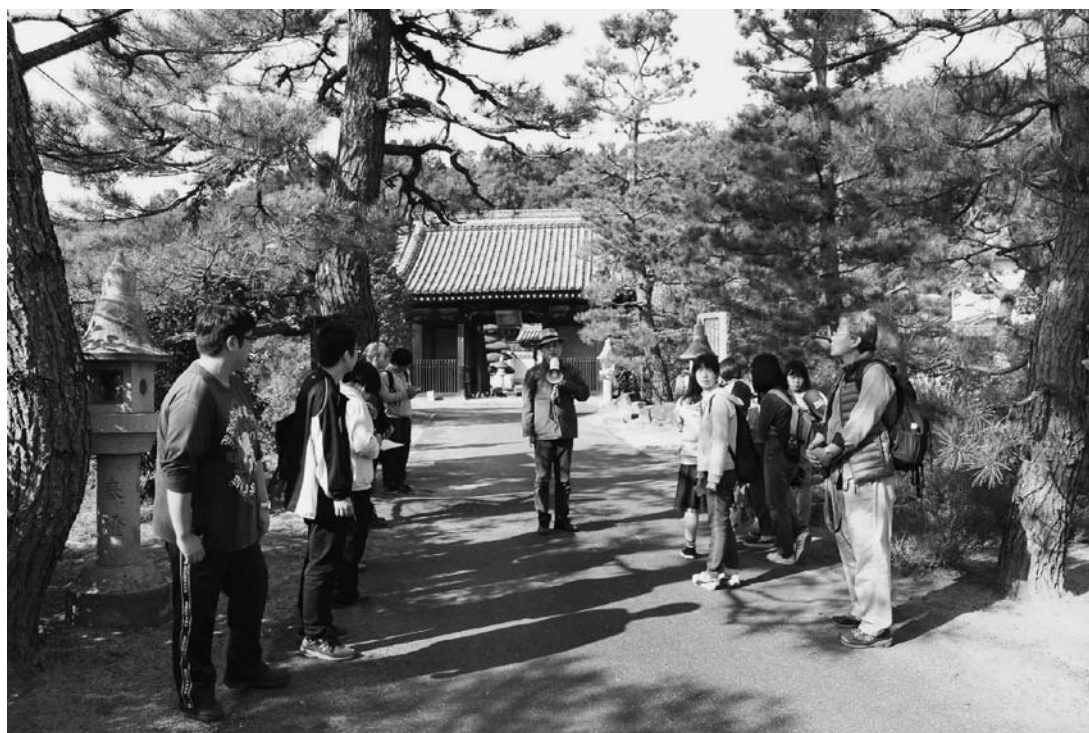
田口義之「びんご古城散策 大可島と村上亮康」

http://www.bes.ne.jp/forum/bingoohrai/taguti_teacher.html 閲覧日平成29年2月12日

第二部

指導とフィールドワークのまとめ

ゼミ指導教員・実地踏査講師から



鞆津茶会記の登場人物について

田口 義之

(備陽史探訪の会会長)

今回のフィールドワークで感じたことを一二述べてみたい。

まず、登場人物は大きく実在の人物と虚構の人物に分かれることである。実在の人物としては、豊臣秀吉・千利休などの中央の人物、毛利元就をはじめとする中国地方の戦国武将、及び備後神辺城主杉原盛重がいる。彼らはこの小説の時代背景を物語る象徴的な存在である。

虚構の人物は、実際に茶会の亭主、客たちである。だが、彼らは虚構とはいえ、それぞれの人物にはモデルがあったように見受けられる。

例に、天正17年の「安国寺茶会」と、天正十九年の「鳥居塚茶会」を取り上げてみよう。

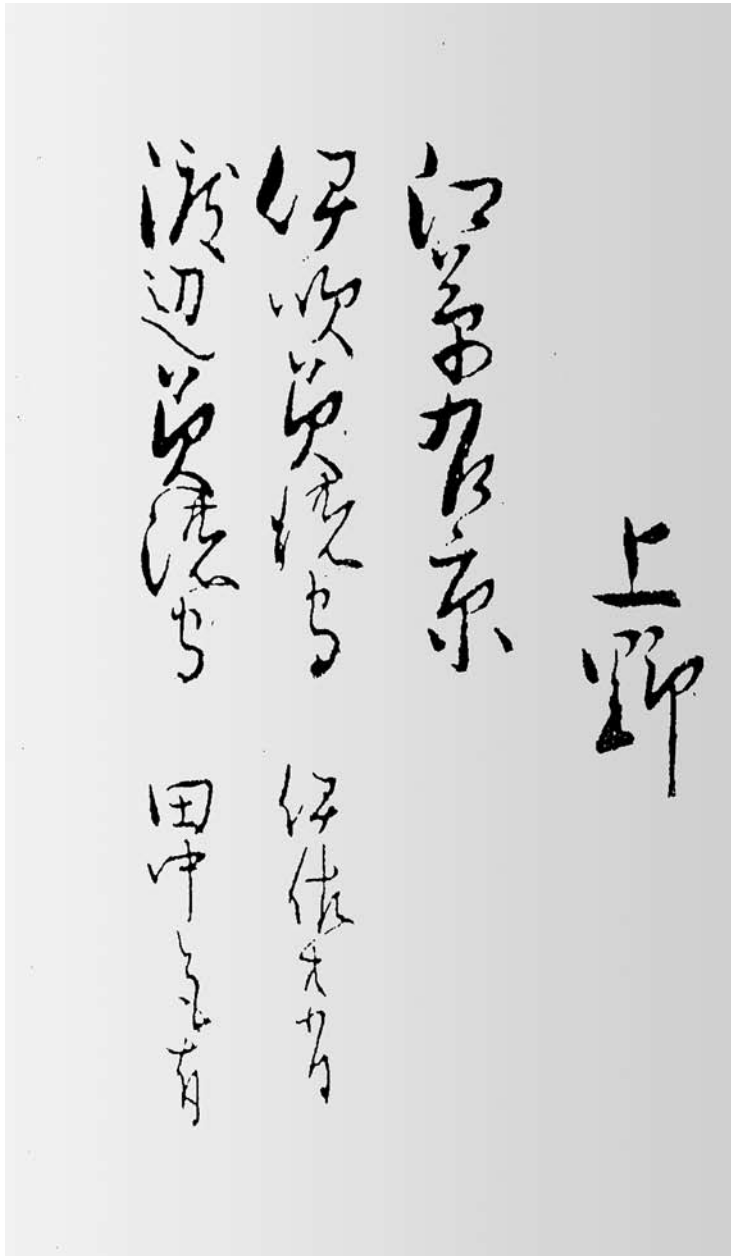
天正17年の安国寺茶会に登場するのは、亭主が有田蔵人介、客が梨田入道齋・村上左門・宮地左衛門尉・粟屋四郎兵衛の4人である。いずれも「名字」はそれぞれの出身地（例えば、宮地だと向島）では知られた名字で、戦国時代の記録にも登場する。しかし、彼らが実在の人物であったかどうかについては裏付けるものは無い。

天正十九年の「鳥居塚茶会」も同様である。ここでは安国寺茶会の顔ぶれに加えて、鳥居兵庫頭・金尾金右衛門尉、安国寺の僧允然が登場する。この内、鳥居兵庫頭は、『備後古城記』という江戸時代の記録に、安那郡湯野村の古城主として見える人物で、実在した可能性がある人物である。金尾金右衛門尉も、同書に、同郡三谷村の古城主として見える金尾遠江守を下敷きに作られた人物と見ていい。安国寺の僧允然に関してはまったく記録が無い。この茶会に登場する人物も安国寺茶会に登場する人物と同様、ほとんど架空の人物と判断していいだろう。

ただし、茶会記に登場する人物や場所が著者の身近な名字や場所であったことは注意すべきである。神辺城や杉原盛重は郷土の城址、武将として井伏が幼少のころから親しんできた人物であった。鳥居、金尾など『備後古城記』に登場する人物、名字も井伏が少年期より身近な存在として慣れ親しんでいた可能性が高い。というのは、井伏自身の生家も先祖が備後の古城主として、この『備後古城記』に登場する土豪だからである。『備後古城記』の神石郡上野村古城主「伊吹美濃守（伊伏ともある）」こそ、井伏の先祖であり、旧家であった井伏家にはこの備後古城記の写本が蔵されていた可能性が高い。井伏は幼少期からこ

うした郷土史書に親しみ、それらが下敷きとなって茶話会記の登場人物が設定されたと考えられる。

以上、茶会記に登場する人物を検証していくと、井伏の生家と上京するまで過ごした加茂谷から福山にかけての歴史と風土がその作品に大きく影響していたことが判明する。



『備後古城記』神石郡上野村の条
二行目に「伊吹美濃守 井伏共有」とある

井伏鱒二「鞆ノ津茶会記」の舞台—神辺町の観光化立案のためのストーリー—

青木 美保

1, 神辺の文化の来歴—興亡の果てに

小説「鞆ノ津茶会記」には、戦国時代、天正年間の神辺が描かれている。そこには、江戸時代以前の神辺の姿がある。現在との最も大きな違いは、やはり神辺城があり、そこに城下町があったことであろう。水野勝成が入城したときまで確かにそれは存在したのである。そして、そこには旧山陽道があり、街道の文化があった。司馬遼太郎の「街道をゆく」には、残念ながら旧山陽道は登場せず、もちろん神辺宿も登場しないが、小説「鞆ノ津茶会記」には、天正十八年六月十四日に深津郡湯野村、鳥居兵庫頭屋敷で茶会があったときの噂話の中に、当時の神辺が登場する。応仁の乱が始まって以来、神辺城下は、戦争の焼き討ちや火事で焼け、周辺地域の豪族が次々に領有したため、従前の建物は焼けて仮普請の家や掘立小屋のような家が多かったと描かれている。

2, 神辺の文化の継承

このように、神辺は、相当に紆余曲折を経て現在に到っていると言えるかも知れない。それは、神辺が古来、西国の宝を掌握するべき要衝であったからである。今回の実地踏査で田口義之氏からお話を聞いたところによれば、神辺城は鞆の浦における瀬戸内海と出雲・伯耆における日本海と海運の恵をつなぐ好地であったため、多くの武将がその領有を狙って戦いを繰り返した場所であったとのことである。そのためか、その文化は、現在に到るまで何度かの興亡を繰り返し、その片鱗が僅かに姿を止めるに過ぎない。しかし、今回の成果として、井伏の描き出した天正年間の備後地方の文化の片鱗を辿ることによって、福山市の町の原形が想像でき、その中での神辺の位置が明確になったことがある。その中で、杉原盛重の業績は大きなものがあった。杉原は、戦国時代の地方の有力豪族であったが、大内の配下にあつて毛利の家臣となり、そこから尼子の家臣となり、さらにまた毛利の配下に戻るといふ有為転変を経験し、ついには信長の中国攻めの余波をくらって滅亡した。そのため、地元では忘れ去られているが、それは逆に言えばこれからそこを蘇らせればよいとも言える。

今回の実地踏査で見学した盛重の業績は、以下のようである。

- 1, 赤坂八幡神社の再興（棟札）
- 2, 天分豊姫神社所蔵 兜（伝・杉原盛重奉納）
- 3, 備後国分寺の再興
- 4, 蓮乗院所蔵 五仏像（仏像に「大旦那 杉原盛重」と墨書）

さらに、「西備名区」には、中世「神辺学校」という学校があったことが出て来るが、井伏は、小説内で、これも杉原盛重が寄付を募って建てたものとしている。

このように見てくれば、中世備後地域の宗教・文化に杉原盛重の貢献した様が想像されるのである。それを継承することが、まずは考えられることかと思われる。

3、神辺の観光化の方法—小説「鞆ノ津茶会記」を観光ガイドに—

その神辺の観光化の第一歩は、やはりその古えの街道の文化を今に蘇らせることである。それでは、それらの文化財のどこにスポットを当てるべきであろうか。

神辺の町作りの計画は今までもなされてきた。神辺町が福山市に併合される以前、町には神辺城を黄葉山頂に復元する計画があったとのことであるが、城の遺稿が発掘されて中止となり、山頂から少し離れたところに城郭を思わせる建物の神辺歴史民俗資料館を建設することで妥協したとのことである。現在は、その周辺が吉野山公園として整備されている。山頂には城跡の遺稿を示す案内板が設置されており、そこからは城下が一望の下に見渡せる。まずは当時の山城巡りということが考えられ、その調査・計画は田口義之氏を中心として実施されているところである。本調査においても、人間文化学科 2015 年度地域文化研修では、神辺城、要害山を見学、今年度は、ゼミの調査として山手銀山城を見学した。これらはいずれも山頂が整備され、20 分程度のウォーキングを楽しむことができる。また、銀山城麓には「弘法の名水」が湧き、足利義昭の居館があったとされる御殿山をめぐるウォーキングコースが設定されてもおり、歴史の学びと健康のためのイベントを組むことが可能である。そして、何よりこれらの城めぐりは、城郭マニアや、戦国時代ゲームファンや、歴女には目がとまりそうではある。

① 学びの文化

しかし、これらはやはりヘビーな観光である。もっと一般的に親しまれるスポットはないだろうか。街道文化と城下町のエッセンスとは何かを考えたい。小説「鞆ノ津茶会記」には、街道の文化として三つのポイントが描かれている。それは、学校と寺と茶会である。いずれも人が離合集散する場所と言える。

小説では、神辺城下が相次ぐ戦火で簡易な建物しかない中で、大きな建物は神辺学校だけであると説明されている。これについては、前述したように、『西備名区』巻三十二「安那郡」の部に「神辺学校 附 木屋次郎長宗」という項目で解説がある。「此地の学校は当世の事と世人是を思へども、古へよりありしとみへたり。」として、「残太平記」の記事を根拠として挙げて、当時石州の木屋の瀬の城主、木屋因幡守の息子で十二歳の「次郎長宗」が「備後国神辺の庄」で「学文」していたところ、尼子晴久が石州を下して毛利家配下の温泉津城主小笠原弾正少弼長雄と対陣した際に、宍戸安芸守隆家が長宗を捕らえて、父・木屋の瀬城主に、降参しなければ長宗を害すと脅したというエピソードを紹介している。長宗の父母は降参するように長雄を諫めたが、長雄がこれを入れなかったため、二人とも自害した。その後、木屋の瀬城の一族郎党五百余騎は城を出て毛利軍に加わり、長宗を大将として温泉津城を攻め、弾正長雄を追放したとある。この挿話を、井伏は小説の中でそのまま使っている。このように、神辺には周辺の城主の息子たちが学びに来るような学校

があったと言える。しかも、この話は、その少年の一人が世に聞こえた英雄であったという事を伝えているのである。

井伏は、神辺学校について「杉原盛重が募金で集めて建てた」とし、次のように説明している。

これは神辺の町と地続きの川北ノ庄にある。昔からの伝統をついだ国学、備後の神辺学校を再興したもので、下野国足利町の足利学校に匹敵する学校だと自負されてみた。鳥居兵庫頭の一族の一人もこの学校の学頭に擬せられたことがあった、ところが予期に反し学頭は大宰府から招聘されて来た。読み書きの師匠は、一遍上人の血を引く大山祇神社から連れられて来た。諸国から来る学生たちに、世の古式を学ばせようとしたのであった。「西備用典」にも「神辺学校は古へより存するもの。学徳を養ばしむるところなり」と云つてある。

詳細な記述であるが、何が根拠か不明である。「西備用典」なる書物も不明である。「国学」は、大和朝廷が地方教育機関として、諸国に一校ずつ設置したもの。大宰府には府学が置かれた。教官は「国博士」と言い、試験は国司が行ったという。

街道の文化の一つとして学校があり、その伝統は古代に遡る国学にあり、中世、杉原盛重がそれを再興、さらに近世には菅茶山が廉塾を開いたということになる。

②祈りの文化

街道の文化の第二は、祈りの場所としての寺である。神辺には、国学と並んで、古代律令体制のもとで全国に創建された国分寺の一つである備後国分寺がある。創建は、仏教伝来まもない天平13年(741)で、創建当時は「現在の参道を中心に東西600尺の築地塀に囲まれた寺域があ」ったとのことで、南大門、金堂、七重塔、講堂があり、「発起式伽藍配置」をなしていたとのことである(神辺町教育委員会調査による、国分寺HPから)。その寺も、川の氾濫や戦火によって紆余曲折を経て現在に至っている。

近世には、菅茶山が住職や近隣の文人と交流したり、歌会を催したり、サロンのような役割を担っていたようである。小説の中では、冒頭の天正十六年五月二十七日に、福禅寺(対潮楼)での茶会が描かれている。そこでは一遍上人筆かとされる「波の絵」なる掛軸が話題になっており、そこから大山祇神社の歴史にまで話題が広がっていく。そこには、信仰の場の社会的な位置づけが見通されている。そこには、やはり社会の縮図があるといえる。

③集いの文化—辻堂の再生

街道の文化の第三は、宿場の交流文化である。これは、茶会という形式自体に描かれているというべきであろう。この小説自体が「茶会記」という記録の形式をとり入れることによって、様々な生活文化を描きながら、そこに集まる人々の噂話に社会の動向を浮かび上がらせるという巧妙なしかけを造っている。そこには、食べ物、器、書、四季折々の花や景物が描かれ、この茶会自体を再現してみたい気持ちにかられる。現代的な**辻堂**のようなものを想像してみる。神辺平野の産物を使った料理や、それらを並べて売ったりするスペースが街道沿いになれば、人々の集いの場になるのではなかろうか。井伏の生家の前の辻

堂では、疎開した井伏が近所の子供たちと遊んだりしたという。それは案外いろいろな発想を生み出す人々の話の交叉する場所ではなかったか。

以上のように、神辺のメインストリートには、廉塾、本陣、国分寺があり、また天寶一、茶山饅頭など名物がある。そこに、学び、祈り、集うという営みが繋がることを期待する。

4, 神辺文化近況

最近、菅茶山記念館で「茶山ポエム絵画展」(2017年1月14日～2月5日)を参観した。これは、茶山の漢詩を、小中学生が絵画で表現した絵画展である。漢詩を絵に描くということは、漢字から詩の世界を視角的に思い浮かべるといふ貴重な体験の実践であり、また地域の歴史を知る営みとして大変意義のある教育実践だと感心した。この絵の中に、まさに神辺の生活感が具体的に表されているのである。今回取り上げられた詩には、当時の子供たちが塾にやってきて学ぶ様子が描かれたものがあり、興味深かった。



「夏日雑詩十二首」の中の、「村童日日挾書来」(村童、日々書を挟んで来る)という詩がほのぼのとして良かった。塾の部屋の暑さに疲れた子供が帰路、涼しいところに休んでいる牛を見つけて牛飼いの子供に交渉し、そこから牛の背に乗せて貰って帰ったという。その絵は小学生が墨絵で牛の背に乗る二人の子供の姿を後ろから描いているもので、ほほえましく良かった。

これこそ、本稿で述べた「学びの文化」の現代的継承そのものと言えるのではなかろうか。実に多くの生徒たちがこれに取り組んで、多くの絵を遺している。**この絵をパネルとして町の到る所に設置**してはどうだろうか。素晴らしい町の案内板になると思う。

5, 神辺と周辺の文化をつなぐ一観光ベルトを想定する

神辺から岡山方面に足を伸ばすと、閑谷学校、吹屋小学校があり、これに廉塾をつなぐと、学校めぐりができる。

また、神辺を中心に、府中、出雲、石見、吉備、鞆の浦、四国をつなぐと、そこには鉄の道があり、中国山地の金属文化めぐりの旅が可能となる。井伏鱒二がエッセイ「架空動物譜」の中で引用している濱本鶴賓の穴の海に関する文章には、穴の海文化が、中国山地の製鉄文化と深い関わりがあることを述べている。これと関連するスサノオノミコトの伝説も、備後を縦断している。神話・神楽との繋がりも興味深い。

これは、また瀬戸内海の水軍の文化ともつながり、刀剣の文化との繋がりも考えられる。以上のように、海と山をつないで、観光ベルトを想定することは可能ではないか。小説「鞆ノ津茶会記」には、水軍も登場する。小説「さざなみ軍記」とも関わりながら、海の文化の匂いも色濃いのである。次年度は大山祇神社など水軍の文化を調査する予定である。

第三部

一般参加者の感想

報道関係者・井伏鱒二研究者から



学生と歩く井伏作品「軀ノ津茶会記」の舞台

栗村 真理子

(中国新聞ファミリーげたの町通信記者)

福山大学人間文化学科・日本近現代文学研究ゼミの学生が調査する、井伏鱒二（1896～1993年）の晩年の小説「軀ノ津茶会記」（1986年）から読み取れる、福山市神辺町と鞆町の神社や史跡などを巡る授業を同行取材した。

講師の指導を受けながらのフィールドワークは魅力的で学生の姿は、かつて私が学生のころ経験した「昭和の時代」愛媛県大三島の社会調査と重なる部分があった。情報がスマートフォンなどの検索サイトから簡単に手に入る現代だからこそ文学作品を通して自らの目で見て耳で聞き、現場を歩いて得た生きた情報から判断、推測し作品に迫る過程は、生涯、問題を解決する手段の一つとして社会人になる前の教育としては、重要なものであるとも思った。

調査は、2回。2016年10月30日は、神辺町。2017年1月22日は鞆町。福山市を南北に移動するルートに当たる。いずれも郷土史家で備陽史探訪の会田口義之会長の現地説明があった。「軀ノ津茶会記」は、備後地方を舞台にした井伏の「在所もの」と呼ばれる作品の一つ。時代は、豊臣秀吉の台頭から朝鮮出兵へと戦国時代末期。まさに戦（いくさ）の時代。徳川家康から始まる長い徳川政権を前に小早川隆景の家臣を主とする備後地方の侍や僧侶が、神辺、鞆両町の寺や武将の屋敷で催される茶会で語った国内状況やうわさ話しを客人として出席した一人が記録するという架空の小説。

神辺町の調査では、架空とはいえ、実話かと錯覚する。作品に度々登場する杉原重盛は、神辺城主であった。重盛が天別豊姫神社＝神辺町＝に寄進したと伝わる、直径約22センチのかぶとの鉢と呼ばれる部分の特別見学では、作品の「天正16年5月27日」の茶会記が思い浮かぶ。重盛の長男元盛と次男景盛の兄弟の遺産相続で景盛は兄貴が父の遺産の半分はよこすと思っていたところ、ほんの少しよこす風をただけで知らぬ顔をして見せた。・・・こういう恨みというものが日に日に大きくなっていく・・・。信長の死後、秀吉と毛利が和議を結んだことにより杉原兄弟にも信長につくと弟が兄に進言したが、兄は反対。神辺城の二の丸で兄が弟に打たれるとある。田口さんの説明では、景盛の野心は、毛利氏にとっても杉原氏の勢力拡大と危惧。天正12年（1584年）8月、毛利氏は、兄の殺害を格好の口実に大軍を派遣し景盛を滅ぼしたとあった。「まさか」地方でと思われるお家存続問題にも天下の情勢が大きく影響するのは常であろう。

蓮乗院＝神辺町＝で、杉原盛重寄進の木彫五仏像の発見があった。講師の田口さんが、その後の研究で備陽史探訪の会が発行した会報193号で披露されたことは、大学と民間団体との連携での成果といえよう。今後、大学と地元団体との事前学習や現地調査を通しての交流が、地域と大学の接点として発展に向け多いに期待できる。参加した学生にとって

も大学教員以外から学ぶ機会は、学びの姿勢や生涯学習のモデルとなり少なからず生き方にも良い影響を与えるのではと思われた。

茶会記に登場する鳥居兵庫頭屋敷跡の見学では、田の中にわずかに残る石の枠組みのようなものであった。田口さんの説明がなければ、分からなかった。屋敷跡が無くなったと仮定した場合、井伏の作品に残るのは後の研究者や学生にとっては手がかりとなる。その鳥居兵庫頭屋敷内の数寄屋にての「天正 18 年 4 月 16 日」の茶会では「まくり畳」の記述がある。「まくり畳」とは、現在の備後地方特産「備後表」。広島県と広島県い業協会が発行した「広島のに業」によると、天正 4（1576）年に織田信長が安土に築城した六層の楼閣には、各層とも内部に畳を敷き、行幸の間には備後表に縁をつけた畳を敷いたとある。井伏は、作品中に今に残る「備後畳表」を「まくり畳」として郷土の産業を折り込んでいる。この作品では、茶会の道具や設え、出される料理は全く茶会の作法や規則を知らない井伏は言うが、料理を再現して食べてみたくなるほどのリアル感が漂ってくる。ただ歴史小説として捉えるのではなく文学作品としての妙であろうと思う。

鞆町の調査では、作品に登場する安国寺恵瓊（えけい）が天正年間（1573 年～1592 年）住職を務めていた備後安国寺を訪ねた。安国寺恵瓊は、毛利家の外交を担った僧侶としても知られている。安国寺では、国重要文化財の安国寺釈迦堂や木造阿弥陀如来および表脇侍立像などいずれも鎌倉時代のものを見学した。

作品の「天正 20 年 12 月 25 日」の安国寺寺内での茶会では、「黄金ずくめの茶席に、黄金ずくめの御茶道具。太閤秀吉公がこの鼻息で、高麗に御出兵か」と村上左門が云った。「太閤検地よりまだ悪い。もう取返しがつかぬ。大失着だ」と恵瓊が云った。とある。

神辺町の調査で田口さんが、検地は米の収量が分かり税としての年貢の計算が出来るようになり、取り立てや財政計画にも重要。地方の武将は、それぞれの懐具合を把握される検地を受け入れることには大きな抵抗があったとの説明があった。恵瓊が、朝鮮出兵を検地より悪い。もう取返しがつかぬ。と歴史の教科書にもある文禄の役を言っただけのは痛快である。恵瓊はいったん喋りだしたら止め処がない。とのキャラクター設定も印象に残る。

鞆町は、「潮待ちの港」として万葉の時代から歌に詠まれたほどの歴史がある。現在は、住民の暮らしと営みもあると同時に、伝統的建造物の保存や観光資源としての活用と課題が山積している。今回 2 回の調査の目的には、市南部鞆から北部神辺両町を中心にした地域文化を掘り起こし、戦国時代の歴史観光や文化を提言するがあった。学生たちは、「鞆ノ津茶会記」にまつわる史跡や寺、神社などの写真撮影や田口さんの説明を熱心にメモしていた。ある銅像の前で学生が、スマートフォンの画像で銅像の人物写真を見せてくれた。目の前の調査対象と講師の説明、検索サイトでの情報を同時に得た学生は、その場で自己判断が出来るのも現代の調査方法であろう。

学生の調査は、福山市が日本遺産の申請を単独で目指し、2017 年度の申請をにらむ時期と重なっている。アニメ映画や歴史ドラマの舞台になった地域は、その場面と同じ場所を

観光客が訪れ写真撮影をする「聖地巡礼」と呼ばれるものがブームとなり地元及び経済効果も大きいと期待できる。

日本遺産申請には、歴史的な意義を語る「ストーリー」のテーマを絞る課題があると新聞報道がある。井伏鱒二は福山市名誉市民。高校の国語の教科書から作品掲載が見送られているという。福山市のストーリーづくりの柱としても大きな役割が期待できる鞆町の国史跡「福禅寺境内」は「鞆ノ津茶会記」に登場する舞台となっている。歴史にもとづいた調査と合わせ、学生が提案する井伏文学から見出す観光ルートは、地元の文豪を取り込むことでオリジナル性が高まり、井伏作品の継承の一部ともなりうる可能性が見え面白いのではなかろうか。

福山大の同ゼミでは、2007年度から井伏鱒二の「在所もの」を取り上げている。作品の舞台や地域文化を調査する授業は、来年度で10年目を迎える名物ゼミとも呼べよう。研究する作品や学生は年度ごとに異なっても、それぞれの研究を集大成することで地元大学として地域貢献の一環となりうる。全国から福山市に井伏研究者や学生を呼び寄せ現地へ足を運び成果を、それぞれの県や地域で発信するのではと夢は膨らむ。

指導の青木美保教授（日本近現代文学）が昨年10月に発表した、井伏鱒二の福山中学同級生宛未公開書簡162通の報道は新聞紙面やテレビ放映で全国に伝わった。書簡の研究を遺族から託されたきっかけは、同ゼミの調査が2008年7月、井伏鱒二の小説「鐘供養の日」の背景や井伏の人物像を探ろうと小説のモデルになったとされる福山市芦田町の西教寺での公開調査が始まり。書簡の研究は、今回の「鞆ノ津茶会記」調査に同行した、兵庫教育大学大学院学校教育研究科の前田貞昭教授と2018年を目途に進んでいるという。

地元の文豪井伏鱒二の作品研究とフィールドワークは、時間のかかる地道な活動だが、福山大学の伝統として今後同大で学ぶ学生に受け継がれることを望む。成果は、井伏書簡の研究と合わせ2018年の井伏鱒二生誕120年の節目を直近の目標とし、福山市のまちづくりや観光が全国区として知られる時流に乗る要素の一部として行政は耳を傾けてほしい。

【写真説明】

田口さんの案内で「鞆ノ津茶会記」に登場する鞆町を調査して歩く福山大学生



「軀ノ津茶会記」の人々

前田 貞昭

(兵庫教育大学大学院教授)

1、茶会記への義理立てか

井伏鱒二「軀ノ津茶会記」は茶会記と称しながら、茶会の様子や茶道具・掛軸についての描写らしいものがなく、まことに素っ気ない。供された料理も、それが美味しかったのか、不味かったのか、人々がどのように賞味したのかサッパリ分からない。茶会が催された地名は記されているが、茶席内外の様子も全く描かれない。

井伏が微細なところに至るまで事物を描き、その名称に関心を向けることは珍しくない。いや、井伏は事物の細部について極めて旺盛な関心を持った作家のように見える。しかし、井伏の場合、事物への関心は、その事物について関わる人間があって、初めて生じているらしい。つまり、事物そのものに興味があったというのではなく、あくまで井伏に関心を持ったのは人間であり、人間同士が織り成す人間模様であるようなのだ。その相関物としてモノの姿が描かれる。

風景描写にしても、例えば「丹下氏邸」末尾、月に照らされた谷間の光景は美しく印象的だ。しかし、それは〈丹下氏邸〉の人々が暮らす〈谷間〉への関心があって初めて成立するものである。「へんろう宿」末尾の、浜木綿と砂地との対比も、夜の場面から一転した清々しい朝を迎えて、前夜の記憶を再確認する機能を持たされている。つまり、それぞれの場面描写は、〈語り手〉の心境を象徴・反映するものとして意味を持っているのである。その点では、朽助を見守るタエトの姿（正しく人事である）を描く「朽助のある谷間」終結部分こそ井伏らしいのだ。

井伏晩年に『焼物雑記』（文化出版局、1985年）という備前焼・姫谷焼などの焼物についての文章を集めた著書があるが、焼き物の形姿や肌合いについて井伏が語っているところは皆無に近い。同書収録の「海揚り古備前」（「海揚り」）が古備前をめぐる欲望の物語であったように、井伏の関心は、まず人間にあって、人間を語る道具立てとして焼き物があるらしい。

だから「軀ノ津茶会記」で茶道具類の名前が列挙されるのは、せいぜい茶会記という体裁への義理立てとしか思えないのである。

2、茶会に集う人々

「軀ノ津茶会記」で関心を向けられるのは、そこに集った人々が語る談話である。茶道具類同様に茶会の列席者も名前と出身地とが、義理堅く列挙されるが、もはや、晩年の井伏は、人物描写にエネルギーを注ぐことは無駄と考えたのか、「軀ノ津茶会記」に登場する人物たちの風貌を描こうともしないし、それぞれの談話を語る過程で人物たちの個性が際立って来ることもない。実際、説明部分がなければ、「軀ノ津茶会記」に記録された談話が、誰の談話であるのか判断に苦しむだろう。

彼等は大きな勢力に順次併呑されることによって、ようやく命脈を保ってきた人たちだ。かつては小地域を支配する土着の領主（国人衆）であった彼等は、まず、戦国大名（毛利氏）による領国支配体制に家臣として編入されるというドラマティックな変化（土着領主としての独立性の喪失）を身をもって体験し、次いで、その毛利氏一族すら天下統一を目指す豊臣秀吉に臣従するという二つの歴史的転換期を生き延びた人々である。彼等が勝者でないことは言うまでもないが、二度の転換期を生き延びている以上、完全な敗者でもない。

そして、中央の歴史に記録されない脇役であったにしても、中央の表舞台に立った主要人物たちの言動を知ることができ、また、その判断が彼等の処遇に大きな影響を及ぼすことを認識できる位置に彼等が立っていることを見逃してはなるまい。

だからこそ、彼等は、己れの境遇を左右したものとして大きな「歴史」を見ることができ、敗者に同情の目を持つ証言者たり得たし、権謀にまみれた人物を鋭く批判することができ、その批判の鋒先を、覇権を握った豊臣秀吉という稀代の謀略家にも及ぼせるのである。その立ち位置は、例えば、深沢七郎が「笛吹川」で描いた、訳も分からないままに次々と戦争に駆り出される貧しい農民とは違う。

ただ先に述べたように、彼等の個性というものは作中には描き分けられてはいない。「軀ノ津茶会記」に記録された談話の〈語り手〉は、辛くも歴史の転変の中を生き延びた複数の声の集合体のようなもののように、私には思われる。

3、フィールドワーク

例えば、井伏の「武州鉢形城」は舞台となった複数の史資料に依拠していて全くの虚構でないのは周知のことだが、井伏生地近くの地名を作中人物名として忍び込ませているし、「漂民宇三郎」には「素老」筆とされる文書が、いかにもそれらしく嵌め込まれている（「素老」は井伏の父・井伏郁太の雅号の一つ）。

「武州鉢形城」や「漂民宇三郎」のことが念頭にあると、経歴については書か

れていても具体的な描写が放棄されている「鞆ノ津茶会記」中の人物たちも、「素老」同様つつい実在したか否かも疑いたくなる。

2016年10月のフィールドワークでは、田口義之氏に案内していただき、杉原盛重（杉原家の内紛が出席者たちの話題になる）・鳥居兵庫頭（杉原家の重臣で、茶会出席者の一人）ゆかりの地をめぐる。

最も驚いたのは、杉原盛重の事蹟が各所に残っていることだった。杉原氏の城下町にあってその石塔の残る三宝寺、奉納された兜が保存されている豊玉姫神社、同じく数体の仏像が納められた二宮神宮寺……そして、数枚の田に変じてしまった鳥居兵庫頭屋敷跡。それぞれの場所を徒歩で廻るには距離があり、いずれも福山大学のバスを利用して、ようやく廻ることができるほどの拡がりがあった。三百年以上隔たっている、なお、備後の各所にこれだけゆかりの物が残されている杉原（盛重）氏の勢力の大きさを、今回は実感しないでは済まなかった。

「鞆ノ津茶会記」が井伏の郷里を舞台にした作品であることは繰り返し指摘されてきたことだが、フィールドワークに参加して、備後地方に伝えられる歴史を、その空間的な拡がりとともに、踏まえていることが初めて理解できたのであった。

そして、思うのは、田口氏の説明がなければ、何も理解できなかったであろうことである。

鳥居兵庫頭屋敷跡は何の予備知識もなければ、住宅地に残る、平凡な田圃に過ぎない。田口氏の説明がなければ、杉原氏の城下町の痕跡を残した道路も、妙に、真っ直ぐで長さのあるとは思うものの、生活道路にしか見えないのも確かなのである。

井伏が「鞆ノ津茶会記」を書き急いだという印象を私は拭き切れない。井伏の意を忖度して「鞆ノ津茶会記」というテキストを十全に理解しようとするれば、テキストには直接書かれていない備後地方の歴史的空間の文脈に再配置しつつ読むことが必要なのだが、逆説的に言えば、それが「鞆ノ津茶会記」という井伏晩年のテキストを読む快樂でもあるようだ。

実地踏査 配布資料

(講師・田口義之氏作成)

備陽史探訪の会の機関誌に発表された 蓮乗院蔵 五仏像

備陽史探訪

第193号 発行の会
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(084)953-6157

備陽史探訪の会の目的
備後を中心とした
地域の歴史を研究し、
愛郷の精神を涵養する。
(会則第1条第2条より)

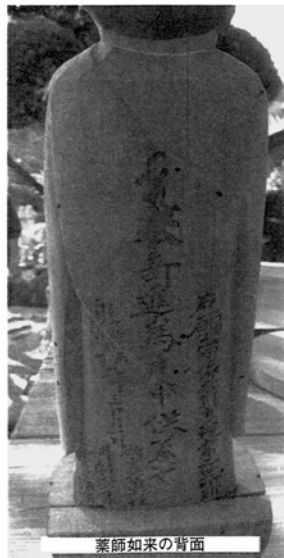
杉原盛重寄進

蓮乗院の仏像

会長 田口 義之

福山市神辺町八尋に蓮乗院という真言宗の寺院がある。下山という御領と八尋を分けた丘陵に南面する二宮神社の境内に接して存在する寺で、明治維新までは同神社の別当寺として神宮寺と称していたという。この寺に杉原盛重の守り本尊という仏像があると聞き、過日訪ねてみた。

仏像は本堂右手のお堂に安置されていたが、床が破れる恐れがあるというので、一緒に訪ねた福大の青木教授と、同道した新聞記者の方が代表して中に入り、住職にいざなわれ慎重に仏像を堂外の縁側に持ち出した。



葉師如來の背面

勢賀敬白
仏師昭榮
三月一日
願主薩州住
水祿九丙子(寅)

葉師如來の背面には、
右願者依此功力現當二世所祈
(梵字) 奉寄進為庚申供養也

阿彌陀如來の背面には
平氏杉原盛重
(梵字) 大旦那
願主勢賀

毘沙門天の背面には
権少僧頭勢賀
(梵字)

と五体は、それぞれ葉師如來、虚空藏菩薩、阿彌陀如來、毘沙門天、聖觀音で、堂内に右から左に順番に安置されていたことであつた。
注目されたのは、それぞれ像背に記された墨書銘である。順に紹介すると、

虚空藏菩薩の背面には
藤原 重信
(梵字) 代官 倉光

阿彌陀如來の背面には
平氏杉原盛重
(梵字) 大旦那
願主勢賀

毘沙門天の背面には
権少僧頭勢賀
(梵字)

聖觀音の背面には
(梵字) 諸旦那等

と、まるで昨日記されたような生々しい墨書が鮮やかに残っていた。

住職によると、これらの仏像群は、元々二宮神社の本殿に祀られていたもので、明治の廃仏毀釈の際に、蓮乗院が引き取って、新たに仏堂を立て安置したものという。

以上の墨書銘で分かるのは、これらの仏像が、永祿九年(一五六六)三月一日、「庚申供養」の為に造立され、二宮神社に奉納されたものであること。願主はおそらく当時の神宮寺の僧であつた勢賀であり、大旦那として当時の領主神辺城主杉原盛重の「守護」も併せて折念されたこと



阿彌陀如來の背面



盛重寄進の阿彌陀如來

なお、永祿九年は、毛利氏が最終

と、更には、二宮神社の位置する安那郡八尋の代官が倉光重信なる人物であつたこと、などである。
庚申信仰は、江戸時代に入ると庚申講、庚申待として広く信仰されるようになるが、本来は神や仏を供養することにより、「禍」を恐れ、現世利益を得ようとしたものである。おそらく、これらの仏像も、そうした本来の庚申信仰の影響で造立されたものであろう。
山城は落城、尼子氏は滅亡した。盛重はこの尼子攻めの有力部将として各地を転戦しており、これらの仏像はその武勲を祈る意味もあつたに違いない。
(補記) 仏像を快く拝観させていただいた蓮乗院御住職、拝観の機会を与えてくださった福山大学青木教授には大変お世話になつた。併せて御礼を申し上げる。

毛利の勇将 杉原盛重

弘治元年（一五五五）、元就が「厳島の合戦」で陶晴賢を破り、西日本最大の戦国大名への道を歩み始めると、備後の国人衆の中にもその有力な部将となって活躍する者が現れた。山名理興の跡を継いで神辺城主となった杉原播磨守盛重がその代表である。

盛重は、山手町に高くそびえる銀山城の杉原氏の出身であった。杉原氏は今の丸の内から本庄町にかけて存在した「杉原保」を「名字の地」とした有力国人で、鎌倉時代の中ごろ、京都から鎌倉に下り幕府奉行人となった伯耆守平光平を祖とし（木下和司「備後杉原氏の出自について」山城志一六集など）、南北朝時代以来、その一族は備後南部に広く勢力を持った。銀山城の杉原氏は、尾道市の鷲尾山城を本拠とした木梨杉原氏の一族で、室町時代後期に山手町に銀山城を築き、本拠とした。

盛重が毛利氏に仕えるようになったきっかけは、神辺合戦での盛重の戦いぶりであった。この合戦で、盛重は理興配下の部将として勇猛に戦った。その「武者ぶり」に惚れ込んだのが、元就の次男吉川元春であった。

神辺合戦後、神辺城には大内氏の城代が入城したが、大内氏の滅亡後、山名理興は元就に詫言を入れ、城主に復帰した。しかし、まもなく理興は病死し、子どもがいなかったため、盛重が理興の跡を継ぎ神辺城主となった。この時、隆景は一番家老であった杉原興勝を押し、大勢は興勝に決まりかけたが、元春は、家老の末席ながら盛重の器量を買ひ、理興の跡継ぎとして強く推薦したためだ。弘治三年（一五五七）春のことであった。

神辺城主となった盛重の活躍にはめざましいものであった。盛重は神辺城主となったいきさつから、吉川元春の配下として主に山陰地方で活躍した。尼子氏の本拠、富田月山城攻略に当たっては、伯耆の江美城を攻略するなどして尼子氏の糧道を絶ち、毛利氏の尼子氏討滅に大きな役割を果たした。盛重は、こうした尼子氏との戦いの中で、毛利氏にその部将としての器量を認められていった。永禄六年（一五六三）には伯耆の尾高城主となり、元就の姪（元就の兄興元の娘）を妻に迎え、毛利氏の山陰方面前線司令官としての地位を獲得した。また、名高い山中鹿介幸盛との戦いは語り草で、当時の文書に「鹿介と盛重、半悪しゅう候」とあって、終生鹿介のライバルとして執念を燃やした。

しかし、盛重が天正九年（一五八一）死去すると、神辺城の杉原氏は滅亡の危機に見舞われた。盛重の跡は嫡男の元盛が相続したが、この相続に不満を持った次男景盛は、兄を殺害し、杉原家の横領を企んだ。この景盛の野心は、杉原氏の勢力拡大に危惧を抱いていた毛利氏にとって、杉原氏討伐の格好の口実となった。天正十二年（一五八四）八月、毛利氏は、兄を殺害した景盛の無道を責め、大軍を景盛の居城伯耆尾高城に派遣して、彼を滅ぼした。

景盛の滅亡にも拘わらず、毛利氏の発展に功績のあった盛重の名跡ということで、その跡は盛重の末子景保が継ぎ、杉原氏の存続は許された。しかし、神辺城は没収され、領地を大幅に減らされた上、天正十九年（一五九一）、出雲に移され、備後との結びつきは絶た

れた。

銀山城跡（福山市山手町）

山手町から本庄町にかけての一带は、古く杉原保と呼ばれ、杉原氏の始祖平光平が鎌倉幕府から拝領し、「名字の地」とした地域である。一带は光平の直系であった杉原氏惣領家が永く支配した地域であったが、室町時代の後半になると惣領家は衰え、替わって庶家であった尾道市北部の木梨庄を本拠としていた木梨杉原氏の勢力が及んできた。木梨庄内の家城の城主であった杉原播磨守匡信は、戦国時代の初頭（十六世紀初め）山手に銀山城を築いて本拠を移した。

福山地方屈指の山城遺跡で、山頂一带には、曲輪の跡や、石垣・土塁・竪堀の跡などさまざまな遺構が残っている。山腹を、赤坂のふれ愛ランドから郷分の八反田に抜ける林道が通り、城跡のすぐ近くまで車で行くことができる。

曹洞宗 三宝寺（福山市山手町）

大永二年（一五二二）、銀山城主杉原匡信によって再興されたと伝わる古刹で、境内西側に杉原氏のものと伝える石塔が残っている。杉原氏の平時の居館や城下町もこの付近に存在したと考えられ、門前には当時の城下町の名残を残した「小路」が東西に走る。文禄元年（一五九二）四月、九州の名護屋城に向かう豊臣秀吉が宿泊したことが記録に残り、現在も境内南方に「太閤屋敷」と呼ばれる地が残っている。

真言宗 田辺寺（福山市津之郷町）

奈良時代、行基が創建したと伝える和光寺の後身で、永禄年間（一五五八～一五七〇）、杉原盛重の重臣で、津之郷串山城主田辺光吉が再興し、田辺寺と改称した。近くに室町幕府最後の将軍、足利義昭の居館跡と伝える地が残り、天正十五年（一五八七）三月、義昭はこの寺で豊臣秀吉と会見、歴史的な和解を果たした。なお、境内南側は和光寺の旧跡として広島県史跡に指定され、境内にはその塔中心礎石が保存されている。（田口義之「備後戦国紀行」より）

湯野城の内と中条土居屋敷

神辺町湯野・東中条

戦国時代、戦乱が日常的になると共に山城は発達し、城主は恒常的に山上で生活するようになった。各地の山城で、慶長5年（1600）の関が原合戦まで使用された城に、築山の名残が見られるのはそのためだ。

だが、平地の居館が放棄されたわけではない。生活に便利な平地の居館もそのまま使用され、「土居」という地名を各地に残している。

以前にも紹介したが、「土居」は「土塁」のことで、転じて土塁をめぐらした豪族の居館をさす言葉となった。

土居屋敷は「方形居館」とも呼ばれ、平安末期以来の伝統を引き継ぐもので、守護や有

力国人クラスで「方一丁」すなわち、一辺百 間 前後が目安で、以下居館主の勢力と格式によって差があった。草戸千軒町遺跡でも室町後期の土居が発掘されており、一辺約90メートルのそれは、守護山名氏に関連する屋敷跡と考えられている。

これらの土居の跡は多く集落に近い山麓や平野の微高地に設けられたため、その姿をとどめたものは少ないが、神辺町内には前に紹介した御領の「堀館」以外、少なくとも2箇所が地上に痕跡を止めていた。

一つは、御領の竜王石山城のところで少し触れた湯野の鳥井氏の居館跡、「城の内」である。

城の内居館跡は、国道486号線が同313号線と合流する少し前を左折し、県道御領新市線にぶつかる少し手前の、堂々川の土手下の一角で、周囲に住宅が建て込みつつあるが、土塁の痕跡と思われる高まりと古墓が残り、かすかにそれと知ることが出来る。

居館の主鳥井氏は、神辺城主杉原氏に仕えた在地武士と伝わり、湯野から御領にかけて給地を与えられていたという（備陽六郡志）。私が最後に訪ねたのは3年前だが、今でも往時の面影を残していることを期待したい。

宮上野介家の本拠であった西中条の今大山城下にも見事な土居の跡が残っていた。「中条土居屋敷」がそれだ。

そこは今大山城跡の本丸から東北に6百 間 程はなれたところにある東面した山麓で現在も屋敷地として使われている。

前面は切り立った崖となり、背後は高さ3 間 の土塁が2重に屋敷地をコの字状に囲み、土塁と土塁の間は深い空堀となり、背後の山続きにはさらに一重の空堀が巡らされている。初めてこの土居屋敷の跡を訪ねた時は、その見事な土塁に圧倒されたものである。

この土居屋敷が今大山城主宮氏の居館跡と即断するのはやや早計である。『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第3集に収録された図面を見ると、平面は一辺五〇 間 弱の正方形で、宮氏クラスの有力国人の居館とするにはやや規模が劣るようである。今大山城の居館は南麓の護国寺周辺に求めた方が良い。

それにしても、この見事な土居の遺構が失われて今は見れないのは返す返すも残念なことである。

何故この福山地方ではまれな、見事な中世武士の居館跡が調査もされずに破壊されてしまったのか、当時の文化財関係者の猛省を促したい。（田口義之「新備後今昔物語」より）

足利氏鞆に起こり、鞆に滅ぶ

田口義之

“潮待ちの港”鞆ほど研究者の頭を悩ませる地名はない。伝説では神功皇后が渡守神社（現沼名前神社）に武具の“鞆”を奉納したことに由来するとも、鞆港の地形が武具の鞆に似ているためその名が付いたとも言われるが、これらの説は全て後世のこじつけであって、もとより信ずるに足りない。それよりも“とも”は邪馬台国時代（西暦3世紀）の投馬（トーマ）国の遺名だとする説に魅力を感じる。広く瀬戸内海の北岸を見渡してみると、岡山県の玉野に始まって、玉の浦（尾道の古名）・玉祖（山口県）など“たま”の付く古い港が分布しているのに気付く。投馬国鞆説はその面積が狭隘なことから否定的な見解が多いが、広く瀬戸内海の北岸（いわゆる吉備の国）をその比定地とすればどうだろう。“とも”は“たま”と共通の語源を持つと考えられるから、投馬国の名は早く失われてしまったが、たまたま周辺の港にのみその名をとどめた、こう考えれば良いのである。

それはさておき、鞆が日本史の大きな舞台となったのは、室町幕府の將軍足利氏との関わりにおいてであった。



足利尊氏（京都等持院）

その結び付きは、初代將軍足利尊氏に始まる。ご存じのように、室町幕府を開いた足利尊氏の悩みの種は、後醍醐天皇を敵に廻したことであった。当時の日本では天皇の權威はまだ生きていた。如何に全国の武士の期待を担った尊氏といえども“朝敵”の烙印は重荷であった。そのため建武三年（一三三六）正月、一度は京都を占領しながらも、後醍醐天皇方の反撃を受けて九州への都落ちを余儀なくされたのである。しかし、さすがに尊氏である。ただでは転ばなかった。この時、尊氏は側近の助言を得て、密かに使いを当時逼塞していた後醍醐のライバル光厳上皇のもとに遣わしていた。上皇の朝敵追討の院宣を獲得して、戦いを“君と君との軍にせばや”と画策したのである。光厳上皇の院宣は、同年二月十五日、尊氏一行が丁度備後の鞆に滞在中に届いた。“錦の御旗”の到来に尊氏軍の意気は大いに揚がった。そして、九州に下った尊氏は瞬く間に同地を平定、大軍を率いて東上し、京都に幕府を開くことになるのである。“足利氏鞆に興る”と言われる所以である。尊氏にとって鞆は自分の生涯を決めた忘れ難い地であったようだ。現在、ここには足利氏が全国に建てた安国寺が法灯を伝えているが、鞆のような狭い場所にそれを建てるにはよほどの思い入れがあったはずである（もっとも現在の重要文化財釈迦堂は鎌倉時代に創建された金寶寺の遺構で尊氏は単に寺号を変えたに過ぎないが）。

しかし、尊氏にとって鞆は、生涯消えることの無かった実子直冬との骨肉の争いの発火点となった地としても、忘れることのできない場所であった。

尊氏には後に室町幕府の二代將軍となった義詮のほかにも少なくとも二人の男子がいた。

一人は義詮の同母兄で夭折したことがわかっているが、もう一人長兄にあたる人物がいた。それが後の直冬である。しかし、その母が遊女であったためか、長く父子の対面を許されることなく、少年時代は不遇の境涯にあった。この直冬に温かい手を差し伸べたのが、尊氏の弟で直冬には叔父にあたる直義であった。実子に恵まれなかった直義は、直冬を自分の養子として晴れ舞台に立たせた。養父の後押しで長門探題に任命された直冬は、貞和五年（一三四九）四月、備後の鞆にやって来た。だが、直冬の立身は、長く続く実父尊氏との戦いの始まりでもあった。その直後、尊氏と直義の全国を二分した争い、“観応の擾乱”が勃発、養父直義に味方した直冬は実父と地獄の闘争を繰り広げることになるのである。直冬が本拠を置いたのが、現在は円福寺の境内となっている大可島である。ここは当時、鞆港の出口を押さえる要害で、直冬が去った後も南朝方と北朝方の争奪の巷となり、幾多の悲話を伝えている。



鞆は、古くから開けた港町である。最近、遺跡としての鞆が注目を集めているが、発掘してみると、鎌倉・室町時代の遺構は勿論、平安・奈良時代から、更には弥生や縄文の遺物に出くわすと言う。

邪馬台国時代の投馬国云々は別にして、この地が港町として古くから栄えたのには理由がある。鞆の沖合は、瀬戸内海の東西から入り込んで来る“潮”が丁度ぶつかるところである。東から来る船はここまで満ち潮に乗ってやって来て、鞆港で一休みした後、こんどは逆に引き潮に乗って西に進めば楽である。西から来る船も同様に、鞆を中継地として“潮”に乗って東に航海した。これが鞆が“潮待ちの港”と呼ばれる理由である。

古来、この地で、船出を待った人は多い。万葉歌人大伴旅人も任地への往復の途中、ここで歌を詠んでいるし、前号で紹介した室町幕府の創始者足利尊氏もそうである。

しかし、鞆が船旅の中継地であっただけに、ここに足を止めた旅人の中には、中央の権力闘争に敗れ、都への望郷の念に燃えながら、空しく“船出”を待つ者も多かった。天正四年（一五七六）二月から、天正十年（一五八二）までの六年間、この地に本拠を置き、都への帰還の夢を、この“潮待ちの港”に託した室町幕府最後の将軍、足利義昭もその一人である。



足利義昭（同上）

義昭が備後の鞆にやって来たのは、言うまでもなく織田信長によって京都を追われたためである。すなわち、永禄十一年（一五六八）九月、信長に擁せられて室町幕府十五代将軍となった彼は、初めのうちは信長に恩を感じ、両者の仲は親密であったが、自己の地位が信長の“傀儡”に過ぎないのを悟った義昭は、次第に信長の存在を疎ましく思うようになった。そして、元亀三年（一五七二）、ついに信長打倒の旗を挙げたのである。結果は、

義昭の敗北であった。山城槇島城に三千八百余人で籠った彼は、信長の攻撃に一たまりもなく降伏、ここに二五〇年続いた室町幕府は幕を下ろすことになるのである。

歴史家は、信長の義昭追放をもって室町幕府の滅亡としているが、栄光の室町幕府の看板を自分が下したとは、彼自身は全く思っていなかったらしい。義昭自身は紛れもなく現職の征夷大將軍であるし（ここで誤解があるようだが、この時義昭は將軍職を首になったわけではない）、京都を離れたのは、単に反逆者信長の難を避けただけである。プライドの高い彼は、こう考えた。そして、あくまで自分は天下を治めるべき現職の將軍であるとして、各地を放浪しながら、全国の大名に信長打倒の檄を飛ばしたのである。

義昭が一番頼りにした大名は、安芸の毛利氏であった。当時毛利氏では英雄元就が世を去ったとは言え、毛利両川と呼ばれた小早川隆景・吉川元春は健在で、その勢力は大坂の石山本願寺と結んで摂津・播磨（兵庫県）に及んでいた。義昭が毛利氏こそ、と思ったのも無理はない。そして、毛利を動かすべく、先に述べたように、天正四年二月八日、備後の鞆に“動座（どうざ）”したのである。



義昭所用の肩衣（熊野町常国寺）

彼が、居を構えたと伝えられるのが、現在鞆の浦歴史民俗資料館の建つ“鞆城跡”である。鞆鉄バス終点で下車し、港沿いの道から町中に入ると、左手に小高い丘が見えて来る。これが鞆城跡である。駐車場から登って行くと、左右に刻印を打った石垣が目につくが、この石垣は義昭当時は無かったものである。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の後、福島正則が芸備の大名として広島城に入って来るが、この石垣はその正則によって築かれた鞆城の遺構である。義昭時代の古い石垣は、丘の下に民家に隠れるように低く対潮楼の方角に続いている。

義昭が鞆にやって来たのは、前号で述べた先祖尊氏の吉例に倣ったことであることは間違いない。天正六年（一五七八）正月、彼は浄土寺の古文書を一覧して証判を加えているが、浄土寺は初代尊氏が上洛途上立ち寄り、戦勝を祈願した足利氏縁の寺である。先祖の筆跡を見た彼は、室町幕府の再興に熱き血をたぎらせたことであろう。

だが、彼の夢は叶わなかった。天正十年六月、宿敵信長が本能寺で倒れ、彼の前途に光明が射したかと思っただけの間、信長の天下統一事業は秀吉によって引き継がれ、義昭は歴史の流れに取り残されて行くのである。鞆城跡の東に接して“神明亭”と呼ばれる安土桃山時代の庭園の跡が残っている。義昭の居館の一部ではないかと言われるこの庭園跡に立つと、枯山水の石組もなんとなくみやびて、戦乱の中でも將軍たる品格を失うまいとした彼の執念が伝わって来そうである。

“鞆幕府”は、幻に終わり、足利氏はついに“鞆に滅んだ”。義昭に関しては「陰謀將軍」だの「流れ公方」だの負のイメージが強い。しかし、信長・秀吉といった英雄を相手に一

歩も引かなかったところなど、彼もやはり一個の英雄と言えるのではなからうか。

大可島城跡（福山市鞆町）

南北朝時代の古戦場、大可島も戦国時代には城塞として利用された。神辺合戦の最中の1544【天文13】年、大内氏は因島村上氏に「鞆浦内十八貫」の土地を与えこの地の守備に当たさせた。村上氏が本拠を置いたのが大可島である。現在は真言宗円福寺の境内となっており、東の波打ち際に、当時の「舟隠し場」の跡などが残っている。

福禪寺

もと、観音堂と呼ばれ、伝承では平安時代に村上天皇の祈願寺として創建されたと伝える。江戸時代には、朝鮮通信使の宿泊所となり、数々の遺品を残した。「対潮楼」の名称は延享五年（一七四八）に来朝した使節の一人、洪景海が名付けたもの。また、楼内に掲げられた『日東第一景勝』の額は有名である。

医王寺

天長三年（八二六）、弘法大師空海の創建と伝え、戦国期に火災によって焼失したが、慶長年間（十七世紀初頭）、福島正則の重臣、鞆城代大崎玄蕃によって再興され今日に至る。背後の太子殿からの眺めは絶景である。

鞆城跡（福山市鞆町）

義昭は初め小松寺を宿所としていたが、後毛利氏の援助で鞆城を「御座所」とした。鞆城は、毛利氏によって天文年間【1532～55】に築かれた城で、のち福島正則によって総石垣の近世城郭に改修された。今日見ることができる石垣は、ほとんど福島時代のものであるが、一部には毛利氏時代のもと考えられる石垣も残っている。現在、城跡には鞆の浦歴史民俗資料館が建てられている。（福山市指定史跡）

惜しくも枯れた法宣寺の天蓋松

医王寺参道を引き返し、左に折れると阿弥陀寺・南禅坊・法宣寺などの古寺が並んでいる。中でも日蓮宗法宣寺は、樹齢600年と言われた古松が庭一面に枝を延ばし、国の天然記念物に指定されていた。この松は、南北朝時代、この寺を開いた大覚大僧正手植えの松と伝え、有名であったが、残念ながら近年枯れてしまい、今では切り株を残すノミとなっている。

山中鹿介首塚（福山市鞆町）

1578【天正6】年7月、尼子再興の戦いに敗れ毛利氏に降った山中鹿介は、毛利氏の本営が置かれていた備中松山城に送られる途中、毛利家の家臣によって備中阿井の渡りで惨殺され、その首は当時この地にいた足利義昭の首実検に供された。各地に残る鹿介の首塚の中では最も信憑性の高いものである。

鞆の守り神、沼名前神社

“お手火神事”で有名な沼名前神社は、明治8年、祇園社とその境内にあった渡守神社を合併し、沼名前（ぬなくま）神社と改称したものである。鞆の祇園社は、「備後風土記」に見える疫隈社に比定される古社で、スサノオの命を祭神とし、現在に伝わる「お弓神事」「お手火神事」は、もともとの祇園社の祭礼であった。現社名の沼名前神社は、今から1000年以上前に完成した「延喜式神名帳」に載る古社で、中世以来その名が失われ、明治になって祇園社がそれに当てられ、現社名に改称されたもので、現在でもその比定を巡っては異論もある。ともかく、同神社は、沼隈郡の郡名の由来となった神社と考えられ、その名の起こりを含めて多くの謎を秘めている。

小鳥神社

鞆の神を祭る神社で、南北朝時代の古戦場でもある。古来有名な鞆鍛冶は備後三原の刀匠の流れを汲むと伝わり、江戸時代以来、活かり船道具の鍛造で繁栄を極めた。今日、鞆に鐵工業が栄えているのはこのためである。

備後安国寺（福山市鞆町）

鎌倉時代に創建された禅宗の古刹。のち足利尊氏によって備後安国寺に指定された。天正年間【1573～92】この寺の住職となった安国寺恵瓊は、安芸銀山城の武田氏の遺児で、毛利氏の外交僧として活躍した。鞆での義昭の側近は恵瓊だったと言われている。のちに秀吉によって大名に取り立てられ、関ヶ原の合戦では西軍方の首謀者の一人となり、合戦後、京都で処刑された。戦国時代に荒廃していた備後安国寺を再建したのは恵瓊だと言われ、釈迦堂【国重文】・庫裏・枯山水の庭園は、1599【慶長4】年毛利輝元・安国寺恵瓊によって改修されている。

編集後記

・今回のゼミでは、「鞆ノ津茶会記」を深く読み込み、実際に小説の舞台となった地でフィールドワークを行った。自身で登場人物や寺社を調査することで、より深い考察や新たな発見を得ることができ、歴史小説の奥深さを知った。(幸子)

・今回のフィールドワークでは「鞆ノ津茶会記」の話に基づいてそのゆかりのある場所を訪問したわけですが、実際に自分の目で確認したことにより、一層作品への親近感、または、不足していた知識が深まったように思いました。作品に触れていなかったら訪れることがなかったであろう場所も多くあったので、とてもいい機会になりました。(菜緒)

・今回「鞆ノ津茶会記」に登場する人物や場所に縁ある神辺周辺や鞆の浦を実際に歩き、その風景を見たことで、まるで自らが小説の中に飛び込んだかのように感じられ、その歴史に触れることもできたため、とても良い経験ができた。(未佳子)

・フィールドワークしてみて、自分の目で見てみる事っておもしろいなと思いました。ただ机に向かって勉強するより確実に印象に残るので、自分の知識になりやすいし、歴史を勉強しているより歴史を感じているというような気持ちになれて楽しかったです。(莉奈)

・私はとても歴史が苦手だったが、杉原家などの歴史に触れることで「鞆ノ津茶会記」がとても読みやすくなり、少しずつだが情景が浮かぶようになった。地元の人たちにも、身近な歴史についてもっと知ってもらいたいと思うようになり、フィールドワークはとてもいい経験になった。(愛)

・2回にわたるフィールドワークで、「鞆ノ津茶会記」の時代の福山がどのような場所だったのか学ぶことができた。今回の経験を、神辺を活性化させるという目標に活かしていきたいと思う。(翼)

★これまで戦国時代の地域の歴史を調べることがなかなかできず、「鞆ノ津茶会記」は敬遠していたが、今回田口義之先生のお導きによって、ようやく小説の中に入れたような気がする。学生たちも、ことのほか地域の歴史遺跡に触れることが面白かったようだ。若い人に地域の成り立ちを知って貰うことは今後ますます大事になると思う。そういう意味で、良いフィールドワークであった。(美保)

福山大学人間文化学部 人間文化学科 日本近現代文学研究室 ゼミ
井伏鱒二の文学（「在所もの」）に描かれた地域文化 2016
福山大学教育振興助成事業

小説「鞆ノ津茶会記」—中世の備後から福山の町を見る—
福山市観光化のためのストーリー構築を目指して

編集・発行 福山大学人間文化学部人間文化学科日本近現代文学研究室
代表 青木美保（福山大学人間文化学部教授）

発行年月日 2017年3月20日

グラビア写真撮影 栗村真理子